

まえがき

教師がある問いを出す。それに応えて何人かの子どもが手を挙げる。一年生では多くの子どもが手を挙げるが、学年が上がるにつれてその数は減っていく。低学年で手を挙げる子の数が多いのは、その問い合わせが易しいからだろう。また、低学年の子どもはあまり恥ずかしがらないし、まだ素直な子が多いので先生の期待に進んで応えようとするのであろう。学年が進むにつれて問い合わせは難しさを増し、子どもらも精神的に成長し、恥ずかしさや人間関係を気にするようになるから、挙手の数が減るのは当然とも言える。

さて、ここで問題にしてみたいのは挙手者の数の減少ということではない。問題にしてみたいのは挙手者と、非挙手者に対する教師のあり方である。大方の教師が、挙手した子どもに目を向ける。そして、手を挙げていない子は教師の視野から消えていき、教師は挙手した子どもの中から誰を指名しようかと考える。つまり、教室の中の積極的な一部分の子どもに 관심を向け、大部分の手を挙げない子が教師の視野から外れることになる。これが問題なのだ。

言うまでもなく、義務教育には「機会均等」の原則が適用される。子どもが平等に持つている学習権は平等に保障されなければならない。挙手者以外は視野から消えるということは許されまい。しかし、教室の現実は大方がこのような形で進行している。以下、大きな注目を集めているユニ

バーサルデザインについては、次のような定義がある。

「教育におけるユニバーサルデザインとは、「より多く」の子どもたちにとつて、分かりやすく、学びやすく配慮された教育のデザインである」

また、「ユニバーサルデザインによる授業」とは、「すべての子がわかる・できる」ことを目指した授業であり、一人ひとりの学び方の違いに応じて、いろいろな学び方が選べる授業である」

全員参加を目指す授業は、即ユニバーサルデザインによる授業だとは申せないまでも、かなりの程度、狙いを共有した考え方ではないか、と私は考えている。積極的な一部の子ども、優秀な一部の子どもを中心進める授業ではなく、「全員」を常に視野に入れ、それぞれの能力に応じて前向きに授業に「参加」させる授業のあり方を、簡潔、平明に述べたのが本書である。

なおもう一点、付言しておきたいことがある。それは私の講話や著述の底流に一貫している思想である。それは、「常に、根本は何か、本質は何か、原点はどこにあるのか、という自問に立つて実践すべきだ」ということである。とかく「どうすればいいのか」「どうやることがよいのか」というハウツー論、技術論に傾きがちな実践のあり方に対して、私は常に警戒と自戒の念を抱いている。そのような可視的、かつ現象的な実用論以前に、まず「何のためにそれを行うのか」という「原点」への回起、「本質」への問い合わせがなされるべきだと考えるからだ。

□幅つたいことを言うようで恐縮だが、私の著作の多くが、「ベストセラーにはならないが、口

ングセラーになっている」という事実は私にとってまことに嬉しいことである。教育書の専門出版社として知られる明治図書出版から、「名著復刻」というシリーズが刊行されている。名著というのは「名高い著書。すぐれた著書」と広辞苑にある。このシリーズは現在十二冊出版されているが、どの本も売れゆきは好調のようで喜ばしいことだ。それは、今の読者のニーズにも十分に応える内容をどの本も備えているということであり、「名著」たる所以だとも言える。その時には役立つが、やがて役に立たなくなる。そういう本は書きたくないし、そういう話はしたくないという思いが、「根本、本質、原点」を常に問いつつ実践人として生きてきた私の強みである。

その「名著復刻」の中の半分、六冊が実は私の本である。今から三十年も前に書いたものだ。時間が経っているので、改めて入念に読み返し、加除、訂正をして欲しいとの編集部からの依頼に添うべく慎重に読み返したのだが、最終的に一字一句改めたところはない。三十年も前の私は実践者として忙しい日々を過ごしていたが、常に「根本は何か、本質は何か、原点はどこにあるのか」を自問しつつ実践に当たっていたので、そこから紡がれた理論や技術が、時空を超えて有益、有効、有用性を保ち得るのは当然ともいえよう。本書もまたその思いを強く貫いて世に問うるものである。なお、本書の刊行について、矢鋪紀子氏と学陽書房編集部の村上広大氏に格別のお骨折り、御助言を戴いた。特に記して感謝を捧げたい。

おえがき………3

第1章 全員参加の授業指針

- ◆ 1 授業の本質は学力形成にある……………14
- ◆ 2 すべての子どもの学習権を保障すべし……………16
- ◆ 3 意欲的、積極的であってこそ「参加」である……………18
- ◆ 4 参加意欲は自分の立場の自覚から生まれる……………20
- ◆ 5 すべての子どもが具有する向上心を覚醒する……………22
- ◆ 6 授業は、計画的かつ組織的な當為である……………24

面白授業ごぼれ話① この虫は何とじうのぞじょう……………26

第2章 全員参加を促す 発問・指示の作法

- ◆ 1 形成学力に立脚した発問を作る……………28
- ◆ 2 指導事項に直結する発問をする……………30
- ◆ 3 短く、端的に問う（一問一事）……………32
- ◆ 4 良問は多様な反応を生む……………34
- ◆ 5 表情発言から子どもの反応を読み取る……………36
- ◆ 6 発問は指示とセットにする……………38
- ◆ 7 具体的、限定的な指示にする……………40
- ◆ 8 指示は徹底させる……………42

面白授業ごぼれ話② 歯医者は儲かるからねえ……………44

全員に考えさせる ノート作業の作法

- 1 挑戦は点検、分類のためにさせる…… 46
- 2 ノート作業で子どもの理解を探る…… 48
- 3 短く、すばりと、キーワードで書かせる…… 50
- 4 一番強く感じたことをノートに書かせる…… 52
- 5 解だけでなく発問の要点も併記させる…… 54
- 6 自分の考えを明確にさせる…… 56
- 7 解の根拠を考え、書かせる…… 58

面白授業こぼれ話④

「しまった」と思いました…… 60

授業を組織する 机間巡回の作法

- 1 机間指導ではなく「机間巡回」を行つ…… 62

- 2 指示に従つた作業をしているか確認する…… 64
- 3 個々の反応を分類し、分布を把握する…… 66
- 4 差異を生がすように指名計画を立てる…… 68
- 5 授業の展開案の継続か変更かを吟味する…… 70
- 6 授業は観念ではなく工夫である…… 72

面白授業こぼれ話④ 秋風かよぶ鼻の穴…… 74

状況を生かして展開する 指名・発言の作法

- 1 教育の根本は「常時導導」…… 76
- 2 指名はあくまでも教師が行つ…… 78
- 3 「受け」の論理は当意即妙にある…… 80
- 4 指名は予告と即断をとりまぜる…… 82
- 5 正答よりも誤答を重視して指名する…… 84

- 6 発言の基本は「話すべきことを話すべき」 「た」 86
 7 「冗長な発言は聞こえさせない」 88

面白授業ごぼれ話⑤ あー、先生するじよー 90

論理的思考力を培う 倾聴・吟味・統括の作法

第6章

- 1 聞くこと、理解することは、学力の基本 92
 2 話し手の顔を見て傾聴させね 94
 3 友だちの発言を評価させる 96
 4 判断の整合性を吟味し、根拠を考えさせる 98
 5 反論に「と思います」はいな 100
 6 進行を束ねつつ整頓する 102
 7 教師の正解を明示する 104
 8 誤りの理由を明示する 106

- 9 テストの丸付けは子どものせ 108

面白授業ごぼれ話⑥ 備えあれば憂いなし 110

すべての子どもを伸ばす 指導の作法

第7章

- 1 知的正義感を高めるしがけを作る 112
 2 「わからな」と直すいふことをほめる 114
 3 否定されることの価値を教える 116
 4 誤答を責めず、歓迎する 118
 5 一人残らずの子どもを大切にする 120
 6 「い」のつぶ音読 122

授業の本質は学力形成にある

◎一人残らずの子どもに学力を付ける

授業の最も重要な役割は、子どもに所期の学力を形成することです。

楽しくなければいけないとか、子どもが生き生きと自ら喜ぶようでなければならないという意見はそれに一理ありますが、仮にそうでなかつたとしても、期するところの学力をそれぞれの子どもが身に付けられたとすれば、それはよい授業といつてよいのです。このように、まず授業という當爲の「根本・本質・原点」を自ら確認しておくことが肝要です。

そして次に大切なのは、授業を受けている子ども全員が、眞面目に真剣に、一人残らず授業に参加していることです。成績のよい子も、よくない子も、元気な子も内気な子も作業の速い子も遅い子も、それぞれの持ち味を生かしながら、全員が自分なりの学力を身に付けるべく授業に立ち向かっていることが大切です。

熱心で喋るのが達者な一部の子ばかりが活躍し、大方の子どもが授業の進み具合を静観しているようではいけません。授業をする最高、最大の責任者である教師は、常にすべての子どもの授業へ

の参加状況を確認し、分析し、把握しながら授業を進めなければなりません。

このような授業に対する理念を端的に示したのが「全員参加の授業」という言葉です。全員参加の授業を常に具現している教師は、どの子も一人として見落としたり、諦めたりしない、愛情深い教師といえるでしょう。

教師から見れば手のかかる厄介な子も、親からすれば何者にも代えがたい家族の宝であり、大切でかわいい我が子です。このような親心を持つて子どもに接するようすれば、どの子からも信頼され、親しまれる教師に成長できること間違いありません。

子どもたちが毎日元気に登校してくるのは、「授業を受ける」ためです。学校生活の大部分は授業時間であり、自分の能力の大部分を使うのも授業中です。また、そうでなければなりません。

授業を眞面目に受けることで、子どもが学力を付け、人間として成長していくことを最も楽しみにしているのは子どもの親であり、家族であり、親族の皆さんでしょう。子どもの期待、親の期待、広くは社会や国家の期待に応え、誠実に子どもを育てねばなりません。「全員参加の授業」を具現する理論や技術を、一人でも多くの先生方に身に付けてほしいものです。

✓ どの子も一人として見落とさない、諦めない

すべての子どもの学習権を保障すべし

◎「発問—挙手—指名方式」は、挙手しない子を取りこぼす

一般的な授業風景を思い浮かべてみましょう。教師が問い合わせをすると、それに応えて何人かの子が手を挙げます。一年生の教室では一斉に「ハイ、ハイ、ハイ」と大勢が手を挙げますが、学年が上がるにつれてその数は減り、だんだん手を挙げる子どもが固定します。あまりに手を挙げる子が少ないと、教師は「これだけかな」などとつぶやき、それとなく挙手を促します。

すると、また一人、二人の子どもが挙手をし、適当なところで教師はその挙手者の中の誰かを指名します。指名された子は起立して発言し、手を挙げていなかつた子どもはほっとします。挙手を求められる圧迫から逃れられるからです。

指名されなかつた他の挙手者は、指名された子どもの発言に耳を傾けます。その発言内容が自分の考えに近ければ賛成するし、不満があればさらに挙手をして発言を求めます。教師は、挙手をして発言を求める子には目を向けますが、挙手をしない子にはほとんど関心を向けません。これが、ごく一般的な教室の授業風景です。

このような授業の進行形態を、私は「発問—挙手—指名方式」と名付けています。ほとんどの教室が、この方式で授業を進めていると言つてよいでしょう。私は、この方式は「すべての子どもの学習権を保障してはいらない」という理由から、なるべくやめていくべきだと考えています。

教師が何らかの問い合わせをして授業を進めるのは、悪いことではありません。問題は、発問に対して挙手を求める 것입니다。問われたことに即座に答えられるのは、ごく一部の優秀な子です。当然ながら、挙手者は一部の少人数になり、教師の視線は挙手する子に向けられて、挙手しない子は視野から消えてしまいがちです。視野に入る子どもが少ないからこそ、教師は「これだけかな」などとつぶやくことになるのです。

挙手をした子は積極的になります。指名されたら発言をする用意があるからです。積極性の高い子は、指名を求めて「ハイ、ハイ！」と声を大きくします。教師は、こうしていよいよ挙手をしない子に目を注がなくなります。教師の関心はもっぱら「挙手児に限定」されてしまうのがこの方式の大分の傾向なのです。

すべての子どもが向上欲求を持ち、学習権を持つています。クラスの子ども一人残らず、その学習権を平等に保障していく授業のあり方を考える責任が、私たち教師にはあるはずです。

 **挙手する子だけでなく、挙手しない子にも配慮した授業を展開する**

意欲的、積極的であつて、「参加」である

◎全員参加の授業とは、子どもも教師も前向きに楽しむ授業のこと

オリンピックやスポーツ大会などでは「勝つ」とではなく、参加することに意義がある」とよく言われます。勝敗にこだわるのではなく、まずその競技に参加することに意義があるというわけです。これは、それなりの示唆に富む名言です。

これをそのまま授業の場面に当てはめると「出席していればいい。出席そのものに価値がある」という理屈にもなってしまいます。しかし、それは誤りでしょう。

教室で授業を受ける子ども一人ひとりが「意欲的、かつ積極的」であつてこそ、全員が「授業に参加している」といえるのです。授業の進行に積極的に関わりを持ち、意欲的に考えたり、話し合つたり、体を動かしたりして初めて、授業に「参加」していることになります。教師はそういう授業づくりをしていかなければなりません。

「当事者」という言葉があります。「そのことまたは事件に直接関係を持つ人」という意味です。「この対義語が「傍観者」です。「そのことに直接関わらないで、はたで見ている人」という意味です。

授業を受ける子どもは一人残らず、授業の「当事者」にならなくてはならないし、またそうしなくてはいけません。そういう授業をこそ、我々教師は作り上げていかなくてはなりません。

「発問—拳手—指名方式」の授業では、とかく一部の当事者と多くの傍観者という構図になります。傍観者は気楽です。「そのことに直接関わらないで、はたから見ているだけ」ですから。しかし、傍観者にとって授業は退屈であり、学力形成もまた保障されないでしょう。

のめり込むように関わつてこそ、授業に「参加」した充実感があり、授業がおもしろく、楽しいものにもなるのです。我々教師は、子どもが授業に夢中で参加できるようなしきや工夫をしなければなりません。そして、それは決して子どものためだけではありません。子どもが前向きに授業に関われば、教師もまたその授業を楽しむことができます。そのような授業が、「全員参加の授業」という言葉にふさわしいものなのです。

意欲的、積極的であつてこそ、本当の参加といえるのですから、そのための手立てが必要です。ポイントは、子どもに自分の立場を明確にさせることです。自分がある立場に立つていれば、誰が賛同し、誰が反対するか、どのくらいの仲間が賛同し、反対するかということへの関心が強くなりります。一方、自分の立場が曖昧だと「どっちでもいいや」という傍観者になりがちです。

 すべての子どもを授業の当事者にする